

21	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	13854018	オーファン受容体アッセイ系を用いた新規生理活性ペプチドの探索とその機能解明	寒川 賢治(国立循環器病センター・研究所・副所長)	A
<p>(意見等)</p> <p>グレリンの生理作用に関しては、一定の目標を達していると考えられるが、本研究グループがノックアウトマウスの解析をしていれば、より明確になったであろう。NMUの生理作用に関しては、新規な作用も発見しており評価できる。これらの研究成果の当該学問分野および関連学問分野の貢献度は高いと思われる。また、研究成果の学術的価値も高い。研究成果の波及性もすでに臨床試験が開始されているので、おおむね高かったと考えられる。</p>				
22	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	13854019	臓器移植における遺伝子治療による免疫抑制・免疫寛容誘導法の開発	藤堂 省(北海道大学・大学院医学研究科・教授)	B
<p>(意見等)</p> <p>臓器移植のための免疫抑制・免疫寛容誘導法のツールに遺伝子治療を選択したことは、新規性が高く、ユニークであったが、報告された研究成果の中に遺伝子治療に関するものが少なかったのが残念である。アデノウイルスベクターの大量調製法、至適投与量、投与経路、投与時期等についても、研究課題にはあげたものの成果報告に入っていない。また、治療の候補遺伝子として、CDLA4 Ig, CD40Ig, HEVEMIg, ICOSIg, HO-1, IL-10 など多くの遺伝子を上げているが、それぞれの遺伝子の利点、欠点の比較がなく、CD40 関連研究に集約された形になっている。また、当初予定していた大動物実験の実施が少なかった。</p> <p>一方で、CD40-CD154 のシグナル制御機構と免疫抑制との関係については、その機序についても詳細に検討しており、高く評価すべきである。また、副刺激遮断と免疫抑制剤との併用に関する研究においても、新規 NF-κB 阻害剤や抗 CD40 抗体の利用等、臨床により近い研究の形を打ち出した点は評価できる。</p> <p>遺伝子治療に限らず移植医療の現場において即戦力になる支援ツールの開発においても一定の方向性が示された点については十分評価できる。</p>				